



Title	ヒトフデ説話試論
Author(s)	美濃部, 重克
Citation	語文. 1967, 27, p. 14-21
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/68577">https://hdl.handle.net/11094/68577</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# ヒトフデ説話試論

美濃部重克

## 一 ヒトフデ説話とは

慶政作といわれる鎌倉時代の説話集、「閑居友」に次のような記述がある。

また、このかきしるせるおくどもに、いさゝか天竺・晨旦・日域のむかしのあとをひとふでなどひきあはせたる事の侍るは、これをはしてしりそむるえともやなり侍らん、などおもひたまひてつかうまつれる也。

これは上巻最初の「真如親王天竺にわたりたまふ事」の中の序的部の一節である。その序的部分は、「閑居友」では既に伝に載っている人をば入れないという断りを、その理由を上げて説明している。その中で、この一節は例外的に伝に載った人をもヒトフデに梗概化して入れる場合のあることを示したものである。説話をその梗概のみを記すという現象がやゝ顯著になつていて院政末から鎌倉期にかけての時代に、説話伝承に新しい意義を認めていた「閑居友」の作者が、梗概化された説話を認識したものとして、これは注目に値する言葉である。今、「閑居友」でこれに該当する実例を示すと覚弁法師の涅槃経をときその座にて入滅せる話——(上略)しかあ

るに、この覚弁の君の經を説ぎ、その座にておはりをとりけん、いたうあはれに侍。かのもろこしの道希法師の天竺にむかひて俱戸那城般涅槃寺にすみわたり侍けるを、のちに燈法師のたづねゆきてみければ、身まかりにけるとおぼしくて漢字の經ばかりのこりて侍けるは、ことにいとおしくだうとくきこゆるぞかし。この事遊心集にかたばかりのせ侍しにや、上巻第十話

とある。道希法師の部分が「ひとふでなどひきあはせたる」晨旦の昔の跡である。これを慶政の言葉に従つて解釈してみると、まず覚弁法師の説話からその入寂の貴さに共鳴を得、それに仲介されて道希法師の昔の跡が思い出され編者の心に一層の感慨が催される。そして、それが見すごしがたくて、ヒトフデにひきあわせたのである。一つの説話から得た感動を、中間に同じ趣きの昔の跡を媒介することによって、一層深いものにするといった経路は、この時代の仏教説話集中でも殊に自照性の濃い「閑居友」・「撰集抄」において見られるのである。今一つ、「撰集抄」での例を示すと、卷一の「浮世住人不知無常偽構世渡事」の中に、編者が越後国しだの上村を旅行しかゝつた折、市に於いて老若の人身を売買するのを見て、そくばくの偽を構へ人の心をたぶらかして売買せる事を見侍りし

に、すゝろに涙こぼれて侍りき。空也上人の山陰の寂墓の板を物さはがしと悲而、都の四条が辻をさこそ物さはがしきにはこそ閑なれとて薙薦にて庵引廻しておはしけん昔も哀に思出され侍りてとにかくに悲の涙せきかねて侍りき。

ある。「撰集抄」では「閑居友」に類する記述はないが、空也上人の部分がヒトフデにひきあわされた日域の昔の跡である。道希法師の場合と異なるのは、空也上人をひきあわせる橋渡しをしたものが、説話ではなくて実見にもとづく感慨である点だけである。見すぐしがたい昔の跡をヒトフデにひきあわせ、その感慨を一層深いものにしようとする点においては違はない。つまり、こゝにあげた二例のヒトフデにひきあわされた説話は感動を媒介として連想され、見すぐしがたさにその梗概が記されたものと言えよう。標題に示した「ヒトフデ説話」とは、一般に、全き形に伝承されてきた説話をその梗概のみを取り出し短小な形に記したものを、「閑居友」の表現に従つて名付けたものである。本稿では主として院政末から鎌倉期にかけてのヒトフデ説話の実態とその意義とを考えてみようと思う。

## 二 霊異記の場合

日本の世間話の生成の初めの時期に当る奈良から平安の初めにかけての世界に生れた仏教説話集である「日本靈異記」において、既にヒトフデ説話は見えている。後に記すようにこうした形態の説話は享受者のこの種の知識に助けられて、はじめて機能的であり得るものだから、それらはこの時代にはもう説話として一応の安定を経たものであった。同時に、人口に膾炙したものであつたに違いない。

い。この集のヒトフデ説話は殆どが中国・印度種のものであり、中國撰述の書物に典拠を持っていた。そうしたヒトフデ説話が、序の部分と説話の付属的文言の中とに現われている。序の中にはらわれるものについては、「三宝絵」の所でまとめてあれよう。こゝでは付属的文言の中に現われた場合について述べることにする。ヒトフデ説話はそれを包んでいる、(1)～それこれを謂ふなり。(2)～何ぞいはめや……めや。(3)諒に知るしなることを。(4)～こも奇異しきことなり。の、きまり文句を基準にして分類できる。

(1) 幼き時より網を用ひて魚を捕り現に惡報を得る話——顏氏家訓の如きは云はく、昔江陵の劉氏驛の羹を賣るを業とす。後一人の児

を生むに頭具にこれ鱗にして頸より以下はまさに人の身をなす、といへるは、それこれを謂ふなり。十一話

(2) 兵災に遭ひて觀音菩薩の像を信敬し現報を得る話——けだしこれ

觀音之力、信心の至る所なり。丁闇の木母すらなほ生相を現じ、

僧の感ずる畫女もなほ哀の形に応ふ。何ぞいはめやこれ菩薩にし

上卷第十七話

て應ぜざらめや。上卷第十七話

(3) 榎本の氏牟婁の沙弥の如法に写し奉る法華經、火に不焼の話——諒に知る。河東の練行の尼が写す所の如法經の功こゝに頭はれ、

陳の時の王興が女の経を読みて火難を免るゝ力の再示することを

云々下巻第

(4) 産みなせる肉団のなれる女子、善を修し人を化する話——昔仏在世の時、舍衛城の須達長者の女蘇曼が生める卵十枚、開きて十男と成り出家して皆羅漢果を得、迦毘羅衛城の長者の妻懷姪して一つの肉団を生み、七日のすゑに到りて肉団ひらきて百の童子あり。一時に出家して百人俱に阿羅漢果を得たり。我が聖朝弾圧する所

の土にこの善類あり。これまた奇異いき事なり。下巻第十九話

こうしたヒトフデ説話を伴つてゐる文言は、何れも全き説話を付属してそれを説明するものである。そして、ヒトフデ説話は全き説話と主従の関係をなしている。それが、(1)では金言・諺・譬に代わるものとして、主説話の意味を説明又は正当化し、(2)では主説話から導かれる思想・教訓を説得力あるものにする為のひきたゝせ役とし、(3)では安定を経た同じ趣きの話として主説話の意味を具体的に納得させるものとし、(4)では主説話と同じ趣きの異朝の話として主説話が本朝での同じく奇妙な話であることを納得させるものとしてひきあわされる。以上を総括的に言うならば、ヒトフデ説話は主説話に従属しその意味を補強する為にひき比べられたものと言える。世間話の生成をこのようにして補強することによって助けているのが「靈異記」のヒトフデ説話なのである。そして、それは内典・外典に見える外国の先駆なのであり、それが信仰的事実として受け入れられたものであった。

### 三 三宝絵詞の場合

「三宝絵」は初期の説話集としての稀少価値のみで説話文学としては新鮮味のない集であるといわれる。たゞヒトフデ説話に関しては、前の場合と違った使い方が示されている。この集のヒトフデ説話は、総序・上中下巻の各序・下巻の法会の解説・中巻にある「靈異記」を同文伝承した説話を付属的文言等の中に見られる。中巻の場合を除くと、すべて全き説話を従属せずに編者の教訓・思想を述べている部分なのである。ヒトフデ説話はそこで例証として独立して用いられる。独立して、というのは、全き説話を従属せずに、と

いう意味である。そしてヒトフデ説話が全き説話と並び記されてい所でもヒトフデ説話は全き説話の意味を補強するものではなく、全き説話と対等に例証としての役割を果してゐる。この方法は「靈異記」の序文にほの見えたものであつた。たゞ、彼にあつては、それが序文の中に限られていたが、「三宝絵」ではそれが下巻に於いて序文以外の本文にも侵出しており、且つ数量の上でも増加しているのである。「三宝絵」の場合とは、中巻の「靈異記」を同文伝承したものを見いた、以上のような、ヒトフデ説話が全き説話に従属せずに、編者が思想・教訓を述べる際の例証として用いられたものと言うのである。なお説話はその殆どが印度種であり、僅かに中国種のものもあるが、日本種のものは一例も見られぬ。次にこの場合の例を示そう。

アマタノ經ノ中ニ 法ヲ伝ヘテ人ニヨマセサトラシムルハ、キハ  
限ナキ功德ナリトイヘリ。マサニシルベシ。法ヲ重クセム人ハ師  
ノイヤシカラムコトヲキラハザレ。(中略) 雪山ハ鬼ニシタガヒ  
テ偈ヲオコナヒ、帝尺ハキツネヲウヤマヒテ法ヲウケキ。況ヤサ  
カシキ僧ノソタヘムハ、カナラズユキテヨムベシ。

これは下巻の志賀伝法会の解説の一部分である。法施が勝れた功德であり、僧の伝法する所必ず行つて法を承くべきことを説いてい。そこに雪山童子・帝釈天の説話をヒトフデにひきあわされている。そしてそれは法を重くする故に師の卑しいことを厭わなかつたことの例証であり、又編者の「サカシキ僧云々」の教訓をよりよく納得させる為のものであった。

### 四 中世説話集の場合

中世説話集といつても、ひどく漠然としている。こゝで対象とするのは、院政期から鎌倉期にかけての説話集で、ヒトフデ説話が目につく程度に現われている説話集に限つてみる。傾向説話集の一群と「古今著聞集」がそれである。「今昔」にも例は検出できるが、全体に比して微々たる数しかなく、「宇治拾遺」に至つては一例も見えぬ。従つて、それらは除外して、「宝物集」「発心集」「閑居友」「十訓抄」「著聞集」「撰集抄」「沙石集」を取り上げる。このうち「著聞集」以外の六集は傾向説話集であり、従つてヒトフデ説話は、そうした傾向説話集での説話を記す際の一つの方法であったと推測される。次に、ヒトフデ説話の用い方を各集毎にではなく、七集を通じて分類してみよう。

(イ) 付属的文言の中にある場合

これはその用い方により三種に分け得る。

- (a) 主説話に従属しその意味を補強する為にひき比べられたもの。ヒトフデ説話を伴っている文言は、主説話に付属しそれを説明するものである。これは「靈異記」的な場合といえる。この場合は七集を通して見られる。その現われ方としては、付属的文言の中で、「かの」「昔の」場合であるヒトフデ説話を「この」「今」の場合である主説話に対照させている。意味の上ではそのように解釈されるが、「かの」や「この」などが表記されていない場合もある。また「こに似たり」「かくや有けむと思ゆ」「このためしにおなじ」なども一応の目安となる。
- 行賀僧都の耳を切り与ふる話——(上略)おろ——唐の昔のあとを尋ねるに、玄界三藏の渡天し給ひけるに有る山中にて慈悲を以てくさくけがらはしき病人を、頭より足のあなうらに致るまで

ねぶり給ふ時、観音となり給ひて心経をさづけさせ給へりと承はる。(中略)彼は上代、是は末代、彼は大国・是は小国・三藏は権者、是はたゞ人なり。更に比べていふべきに特らねども、今の振舞ひ給へる様はたとへもなくぞ侍る。(下略)  
著聞集古典大系  
主説話、つまり、「是」「今」の行賀の説話に、ヒトフデ説話、つまり「彼」「昔」の文跡の跡がひき比べられているのである。  
行尊僧正の遁世の話——昔、玄賀僧都、伊賀國の郡司につかへて侍けるためしにおなじく侍り。  
著聞集古典大系  
主説話たる行尊僧正の説話に、玄賀の説話がヒトフデにひき比べられている。表記はないが、前者は後者の「昔」に対して「今」の場合なのである。

(b) 主説話に従属してそれを説明するものではなくて、主説話から得た感概を仲介として連想してきたもの。ヒトフデ説話を導いてくる文言は自照的なものである。この場合はまず、主説話及びそれから得た感概を記し、「いたうあはれに侍りし」「すゝろに涙のこぼれて侍りき」「うきよをいづる種ともなしけるにやとも思ふ」などで結ぶ。そしてそれに続けてヒトフデ説話が記され、それが又「思ひ出されてくり返し貴く侍り」「あはれにしおびがたきえにこそあらめかし」などで結ばれる。大方はそうした言葉が目安となる。この例は「閑居友」「撰集抄」に見られる。それは(イ)で記したように、編者の感動によつて連想された昔の跡が、見すぐしがたくてヒトフデにひきあわされたものなのである。なお具体例は(イ)を参照されたい。(c)は(b)と同じく主説話とは直接の関係はなく、付属的文言の文意をよりよく納得させる為の例証として用いられたもの。その目安となるものとしては、ヒトフデ説話の直前の「故に」「おほ

くの道あり」「されば」など、又、後での「とりへなり」「是ら皆云云」「ためしおばかり」などがあげられる。この例は「抄石集」「撰集抄」「発心集」に比較的多くみられるが、それらの集は付属的文言が長くてそれが主説話の説明にとどまらず、作者の思想・教訓・感情まで敷衍して述べることが多い。ヒトフデ説話はそうした叙述の部分に例証としてひかれている。

静円供奉の遁世の話——（上略）それ、徳をかくすに多くの道あり。唐の积惠叡の八千里隔つる境に至りてあやしの姿にやつれて羊をなん飼ひ給へり。此の國の真範はつたなき形となりて亞のまねをし給へり。是皆徳をかくしかねてとかく煩ひ給ふめり。（下略）

（撰集抄三三）

惠叡と真範の説話がヒトフデ説話である。それらは主説話たる静円の説話と内容的に通じるが、その説話に付属してそれを補強するのではなく、徳を隠す為に身を偽ったことの例証として用いられているのである。

（口）付属的文言の中にある場合

ヒトフデ説話を伴っている文言は、序、及び主説話に從属せずに編者の思想・教訓を述べている文言である。これは「三宝絵」的な場合といえる。こゝではヒトフデ説話は、編者がある思想・教訓を説こうとするのを助ける為の例証として用いられており、現われる場所こそ違え、（イ）の（c）と同じ用い方なのである。従つてその目安となるものは彼と共通するが、更に二・三追加すると、ヒトフデ説話の後に「たぐひなり」「といへるも云々」などがあり、又そうちた表記の無いこともある。そして、それを包む文言の中に全き説話も共に現わることがあるが、その場合「三宝絵」の所で述べたよ

うに、兩者は例証としての役割に於いて対等である。この例は「宝物集」・「十訓抄」・「沙石集」・「発心集」に主として現われる。

大臣の燈臺鬼となり居たる子に教はるゝ話の全き形があつて）大目健連ハ母ノ成臺女が餓飢城ニ落タリシウエ□□タスケ、妙莊嚴王ノ二人ノ子ハ親ヲミチビキテ菩提ノ道ニ入タリ云云本物集一卷カヤウノコトハ我朝日本國ニモオホクヨエ侍メリ。（次に、輕

こゝには上記の表記は何もないが、大目健連・妙莊嚴王の部分がヒトフデ説話である。そしてそれらは全き説話たる輕大臣の説話と対等に、子が宝であることの例証としてひかれている。

（八）説話そのものゝ中にある場合

これは例が極めて僅かしかない。そのうち、伝の一部をなすものは「今昔」に僅か見えるが、こゝではそれについてはふれぬ。それ以外に、恣意的に挿入され説話そのものゝ首尾内容と密接な関係を持たないものがある。次に具体例を掲げて解説を加えてみよう。

良峯宗貞は深草の御門の近臣也。藏人頭なりける時、御門にお

くれたてまつりければ、やがて頭おろしていくづくともなくまどひありきけり。長谷にて、又妻に逢たりけれどもあらはれず。清水にては小町にあやめられてにげにけり。さて次のとし、御門の御はての日に成て、殿上人ども御服ぬがむとて河原に出あへりけるところに、

みな人は花の衣になりぬなり苦の袂よかはきだにせよ  
とよみて、かしはの葉にかきて、あやしのわらはしてさしおかせたりけり。とてみると、良峯の少将の手にみなしして、いづらとて使をたづねるに見えざりけり。さる程に後には僧正に成て、花山の僧正遍昭とぞいはれける。六朝八話

この原話は「大和物語」で、その一連の遍昭説話の前半に、深草帝の崩御から「みな人は」の歌に至る説話が語られており、そこでは①のみがある。そして歌よりうしろ従つて歌よりのもの出来事として五条后との対面と範疇、そして②の説話が記される。つまり②は「十訓抄」の編者の恣意によって添加されたものである。又「十訓抄」ではこの説話が「可<sup>レ</sup>存<sup>ニ</sup>忠信廉直<sup>ニ</sup>事」の例証としてひかれている。それ故例証に徹するなら、①・②は共に不要である。①・②は共に余計なもの、殊に②はそこにあっては寧ろおかしいものである。この例はヒトフデ説話の用い方について考え方せるものがある。

ヒトフデ説話は、説話一箇を取り上げて、その消長をみる時、伝承という意識から離れた、説話が非説話化された極端な場合としてそれを捉えることが出来る。そして、それは非説話化された説話として、他の何か、(他の新しい内容と形態を持った説話かもしけぬし、又、説話から離れた評論・解説かもしけぬ。)を成り立たせるものとして利用されているものとも言える。

## 五 ヒトフデ説話の生因

多数のこうしたヒトフデ説話は、説話世界のどこにその生因が求められるだろうか。中世の傾向説話集や「著聞集」の場合について、少くとも次の四つが上げられよう。

一は、傾向説話集や「著聞集」では説話が「ためし」としてひかれたことである。「ためし」としてひかれる、説話は話としての面白さよりも、その事実を語るものとしての属性にウェイトをかけて記される。そして面白く語ろうとする意図は失せ、語り口の面白さは問題にされなくなる。それ故、説話に具象性を与えていた端々

でのディテールは切り捨てられ、話の筋だけが辿れる位に説話は簡略化されるのである。また随所に見られる註記にも、皆が知つているから簡略化したとか、事が長くなるから省略するとか言うものが目につく。説話を耳を喜ばしむるものとしてどうではなく、事実として捉え、それを「ためし」として伝承しようとしたが故に、こうした簡略化や省略が平氣で行われ得たのである。そうした「ためし」としての意図が徹底されることによつて、説話がその梗概だけをヒトフデにひきあわされることが生じたのである。

二は、日本の説話世界が量的に豊富且つ歴史を持つものとなり、享受者との間に説話知識の共通の基盤が生じたことである。院政期から鎌倉期にかけて、ヒトフデ説話のふまえていた仏教説話や世間話は世間話の集成の書といわれる「今昔」を見ても、量的にかなり豊富になっていたことが知られる。そして内典・外典に典拠を持つものは言うに及ばず、日本の説話も「靈典記」の時代から育くまでてきたものであり、長い歴史を持っていたらうことは容易に推察される。〔〕に上げた「閑居友」の序的部で、中国・印度の昔の跡のみならず日本の昔の跡をもヒトフデにひきあわすと言つたことからも、「靈異記」・「三宝絵」の頃とは違い、ある説話からの感動が直ちに日本種の説話の連想を呼び起しに日本種の説話が安定を経ていたことが知られるのである。そうした説話世界の拡大は、当然享受者の説話知識の拡大につながるものであった。その説話知識は伝やその他の説話集を通して、或いは講筵や雑談の折に披露され吸収されることによつて共通の基盤を持つに至つたのである。ヒトフデ説話の存在自体が逆にそのことを推測させてくれる。そうした共通の説話知識の基盤の上に立つて説話はその梗概のみを記しても、享受者が

その説話知識によってそれを補足し納得したのである。こうした享受者による補足を期待できたが故に、説話を梗概化しヒトフデに記すことにも可能になったわけである。

三は、享受者の、説話を知識としての興味により見る態度である。それは前の二者つまり事実を語るものとしての属性に重点をおいた説話の捉え方や、享受者側の説話知識の拡大ということに大きく関係している。説話知識が豊富になるにつれ、享受者は説話のタイプ・素材に精通していった。それ故、伝承者が説話を記しても記し丁らぬうちに、享受者はその大体を察してしまい、一人でそれを納得してしまうようになった。世間話、それも一回的な面白さしか持たぬものについてはなお更のことであろう。こうした類の説話については、知っているか否かが興味の中心になっていた。「閑居友」の序的部に次のような記述がある。「またよの中の人のならひはわづかにおのがせばくあさくものをみたるまゝに、これはそれがしがしるせるものゝ中にありし事ぞかしなど、よにもたやすげにいふ人もあるべし。」これは「閑居友」では既に伝に載っている話はとらぬとすることの理由の一つとして上げたものであるが、当時、享受者が説話に対する時、知識として説話を見る態度が一般的になっていたことが知られるのである。こうした享受者の見方を意識して、周知の説話を「ためし」として記す時、慶政がおそれたと同じ種類の非難をうけることを避けて説話を簡略化して記そうとした。それが徹底されると説話はヒトフデまで梗概化されることもなつたのである。

四は、傾向説話集や「著聞集」の編者の説話知識のひけらかしによるものである。前の分類で(1)の(a)のように、へに似ているとか

似ていないとか、或いはこの例におなじであるとかないとか、といって、全く説話を付属して、ひきあわせていくヒトフデ説話の存在から逆にこうした原因を挙げうるのである。つまり、そうしてひきあわされた説話が説明として納得のいくものもあるが、そうでない場合も多く、就中、「十訓抄」などには(ハ)のように、そこにつては知つて誤りであるような余計なものまで存する。こうした点を説話の知識としての見方に考えあわせてみる時、こうしたヒトフデ説話は編者が自分の知識として持つた説話を出来るだけ多く披露しようとする態度から生じたものと解し得よう。それは生因として前の三者とは同列に扱うことは出来ないが、ヒトフデ説話の多数生まれるに至つた一因として考えてよいものであろう。

以上の四者は互いに緊密な関係を持ちつゝヒトフデ説話の生因を成していた。そしてまた、ヒトフデ説話から逆に当時の傾向説話集や「著聞集」のふまえている説話世界が以上のようない性格を持つたものであることが知れるのである。

## 六 ヒトフデ説話の意義

説話をヒトフデに梗概化して記すということは、説話文学の方法とどのように関係するのだろうか。

説話は本来、人の耳を喜ばせる性質を持っており、伝承者も享受者も共に説話をそのようなものとして意識していた。従つて、説話集において説話を説話の面白さに導かれつゝ伝承しようとする時、そうした意識が編者の意図の上に働いていたのである。「今昔」や「宇治」等は人の耳を喜ばせるとする編者の意図が積極的に実現された代表的な説話集と言える。その「今昔」や「宇治」等の説話文

学としての形態と方法は、西尾光一氏によつて説話物語として捉えられた。口承・書承の如何にかゝわらず常に口がたりの形でうけとめ、説話物語として再構成しようとする「今昔」「宇治」等において、編者の主体は表現された説話の上に大きく顔を出すことはない。説話の末に批評が僅かに添加される時にも、「トナム語り伝へタルトヤ」式に、常に伝承されたものとして表記される。話としての面白さが意識され、それを中核にして伝承された説話が前に出され、編者の主体は隠れてしまう。こうした説話物語の中に、ヒトフデ説話は現われてこないのである。

それが方法として意識されて用いられるのは、傾向説話集や「著聞集」、主として傾向説話集においてとある。院政末から鎌倉期に簇出した「宝物集」以下の傾向説話集を、西尾光一氏は批評的発想を伴つたものという観点において説話評論書と呼ばれる。説話評論の形態においては、説話を説話として伝承しようとする編者の意図は稀薄であり、説話が編者の主観的な判断を露骨に施されたものとなつてゐる。そして説話伝承の主眼は、説話の面白さに導びかれて説話を伝承しようとする所から、編者自身の思想・教訓・感概を表明する為に、内典・外典や日本製の伝・説話集・歴史物語等に伝えられた説話を、その事實性にウェイトをかけて「ためし」として記そうとする所へと移つてゐるのである。説話伝承という意識が寧ろ後退し、編者の主体が前に出る。そこにおいて、説話は伝承されてきたもとの形態が意識されず、「ためし」として全体の形が漠然と促えられ簡略化の方向に進むのである。ヒトフデ説話は、そうした説話の「ためし」化が極端に進んだものである。しかし、それは傾向説話集の中で特異なものとして意識されているのではない。四

<sup>注1</sup> 西尾光一氏「中世説話文学論」一三九頁  
<sup>注2</sup> 同上書 一六四頁  
<sup>注3</sup> 「今昔」も説教の種本として意図されたものだから、説話はためしとして手段化されたものであつて、その点に関しては傾向説話集の方法も同じではないか、という議論も出てこよう。

しかし、それが具体的な唱導の場で用いられる場合は兎も角、話題文学として「今昔」の中に現われた伝承意識について見る限りではそうは言えぬ。説話を「ためし」として利用し何かを言おうとする意図よりも、説話そのものの、又その面白さを伝承しようとする意図の方が強いのである。「百座法談」などに見られるような具体的な場で唱導に用いられて、はじめてそれが「ためし」化されて用いられたと言えよう。「今昔」の中のものとして見る場合、説話は未だ「ためし」化される以前のものである。

（大学院学生）  
で示した中世の実態例に見る通り、（イ）のものは編者の感概を、（ロ）は編者の思想・教訓を表明する為にひきあわせている。こうした引用の仕方は傾向説話集において、一般に説話が批評的発想を伴つて記される仕方なのである。こうした点から、傾向説話集の批評的発想を伴つた説話伝承において、編者の説話伝承に対する意識をヒトフデ説話の上に見ることが許されるのである。

編者の説話伝承に対する意識という観点から説話文学の方法を考える時、傾向説話集の特色はこのヒトフデ説話の上に促えることが出来るのである。